

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.236

1-3

January-March 2020

特集

02

水戸室内管弦樂團
MCO
30年の軌跡

- | | |
|--|--------------------------|
| 04 豊嶋泰嗣(ヴァイオリン)、フィリップ・トンドゥル(オーボエ)インタビュー | |
| 06 トリオ・インク [川崎洋介(ヴァイオリン)、ヴォルフガング・ケッセル(チェロ)、ヴァレリ・セレブリャーニ(ピアノ)] インタビュー | |
| 08 池辺晋一郎(作曲)インタビュー | 14 合唱セミナー2020 講師:田中信昭 |
| 10 ドン・ジョヴァンニの悲劇 | 15 「ブンカ」と「ゲージュツ」のはなし その4 |
| 12 砂川涼子(ソプラノ)インタビュー | 16 INFORMATION |

水戸芸術館
ART TOWER MITO

水戸室内管弦楽団

30年の軌跡

文・中村 晃



1998年6月第1回ヨーロッパ公演(会場:ウィーン・ムジークフェライン大ホール)

水戸室内管弦楽団(MCO)は、1990年に水戸芸術館の専属楽団として結成されました。そして、今春に30周年を迎えます。

MCOの誕生～吉田秀和初代館長の構想～

吉田秀和初代館長がMCOに付した活動の理念は、今も変わることはありません。あらためて、吉田初代館長の言葉を紹介します。

「日本も洋楽を取り入れて、百有余年。今では優れた音楽家が次々に出てきて、外国に出かけていって、あるいは独奏家として、あるいは室内合奏団や交響楽団のメンバーとして、あるいは内外の音楽大学などの教師、研究員としてめざましい活躍をしている人が多くいる。その人たちの中から選りすぐって、室内管弦楽団をつくったら、いったいどんな音楽が響くことになるか。それは過去百年余りの日本の音楽の歴史を知り、その意味を考えてみるための一つの手がかりになるのではないか。」

MCOの発展～小澤征爾館長の試み～

吉田秀和初代館長の構想を実現させ、楽団の発展に努めたのが小澤征爾現館長(結成時はMCO音楽顧問)です。2013年に吉田初代館長の遺志を継いで、水戸芸術館館長ならびにMCO総監督に就任しました。小澤館

長は、ボストンやウィーン時代などの超多忙な時期でも、MCOの公演にはおよそ年1回のペースで出演しています。2003年2月の第53回定期演奏会からは、モーツァルトの後期交響曲のシリーズを開始。2009年4月の第75回定期演奏会では、ご子息で俳優の小澤征悦さんが、メンデルスゾーンの『夏の夜の夢』の語り手として登場しました。館長就任後の2014年5月の第90回定期演奏会から、ベートーヴェンの交響曲シリーズを開始。2017年10月の記念すべき第100回定期演奏会では、金字塔とも言える『第九』の演奏がありました。

小澤館長は、未来を担う子供たちのための催しにも情熱を注いでいます。水戸市内および近郊の小学5年生を市内体育館に招いて開催する「MCO子どものための音楽会」は、小澤館長の発案で2004年にスタートしました。毎年およそ2,800人の子供たちを招き、2019年までに16回開催、のべ42,431人にMCOの演奏を聴いてもらいました。また、MCOのメンバーが講師を務め、市内小中学校の吹奏楽部や県内高校の吹奏楽部および弦楽合奏部を指導する「MCOセミナー」も2012年から開始しており、2019年10月までに、のべ62団体、1,771人の児童・生徒が受講しています。

MCO精神の継承～楽団員の変遷～

30年の歳月を経て、MCOメンバーも世代交代の時を迎えています。MCO結成初期から楽団員の中核として、オーケストラ全体を牽引してきたのが潮田益子さん(2013年逝去)でした。2010年からはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のティンパニ奏者を長年務めたローランド・アルトマンさん(2016年逝去)が参加しました。NHK交響楽団のコンサートマスターを経て、MCO団員となった堀伝さんは、現在MCO楽団長を務めています。国際的に活躍する腕利きの日本人演奏家というMCOメンバーの有り様を体現した3人の管楽器奏者が、工藤重典さん(フルート)、宮本文昭さん(オーボエ)、水野信行さん(ホルン)でした。

一方、若い世代の素晴らしい演奏家たちがMCOメンバーとして加わっています。1990年代後半には、川崎洋介さん(ヴァイオリン)、ラデク・バボラークさん(ホルン)などがMCOに参加します。2000年代には、東京クワルテットの創設メンバーである原田禎夫さん(チェロ)、川本嘉子さん(ヴィオラ)、池松宏さん(コントラバス)、宮田大さん(チェロ)、島田真千子さん(ヴァイオリン)が参加。2010年代には、国際的なソリストの竹澤恭子さん(ヴァイオリン)、フィリップ・トンドゥルさん(オーボエ)、小栗まち絵さん(ヴァイオリン)、佐份利恭子さん(ヴァイオリン)、リカルド・モラレスさん(クラリネット)が参加します。

MCOが日本を代表する特別なオーケストラであることの自負と吉田初代館長の遺した活動理念は、若い世代のメンバーへと引き継がれています。

MCOと共演したゲスト演奏家たち

当代を代表する名演奏家たちが、水戸に来てくれました。これまでの主な

共演者をご紹介します。ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ(チェロ・90年第1回)、若杉弘(指揮・90年第3回、96年第26回他)、アンドラーシュ・シフ(ピアノ・91年第7回他)、シモン・ゴールドベルク(指揮・93年第13回*同氏の生涯最後の指揮)、ドリス・ゾッフェル(メゾ・ソプラノ・93年第16回)、ルドルフ・バルシャイ(指揮・94年第20回、95年第23回他)、ブルーノ＝レオナルド・ゲルバー(ピアノ・96年第25回他)、ナタリー・シュトゥツマン(コントラルト/指揮・97年第30回、2014年第89回他)、ライナー・クスマウル(ヴァイオリン/ゲスト・コンサートマスター・98年第36回、01年第47回他)トレヴァー・ピノック(指揮・99年第40回他)、広上淳一(指揮・00年第24回他)、準・メルクル(指揮・04年第57回、06年第66回他)、イアン・ボストリッジ(テノール・06年第66回)、児玉桃(ピアノ・08年第3回欧州ツアー他)、小菅優(ピアノ・11年第82回他)、ハインツ・ホリガー(指揮/オーボエ・12年第85回他)、大野和士(指揮・13年第86回)、ユーリ・バシュメット(指揮/ヴィオラ・16年第96回)。そして近年では、別府アルゲリッチ音楽祭との共同制作で、マルタ・アルゲリッチさんとの共演が毎年行われています(17年第99回、18年第101回、19年第103回)。

MCOヨーロッパ公演の成果と課題

吉田秀和初代館長は、MCOの活動を通して、日本人が西洋音楽を演奏したり、聴いたりすることの意味を探ろうとしました。その後、吉田初代館長は、MCOの演奏を外国の聴衆や批評家たちはどのように聴くのかということが、その探求の手掛かりになるのではと考えました。そして、これまでに3回のヨーロッパ公演を行いました。その実現にあたっては、小口達夫総楽団

長(現・名誉顧問)の資金面をはじめとする献身的な尽力が無ければ実現できるものではありませんでした。

第1回ヨーロッパ公演は、小澤征爾館長の指揮で1998年6月に、ハンブルク、チューリッヒ、ウィーン、ルートヴィヒスブルク、フィレンツェで行いました。第2回も小澤館長指揮で2001年3月に、フィレンツェ、ミラノ、ウィーン、パリ、ミュンヘンで開催。第3回は、小澤館長の出演が体調不良で取り止めたのですが、MCOメンバーの強い意志と希望により、指揮者無しで2008年6月に決行。ミュンヘン、フィレンツェ、マドリッドで演奏を行いました。そして、この3回のツアーを通してMCOは、「世界有数の室内管弦楽団」との評価を確立させました。

最初のヨーロッパ公演にはシューベルト(マラー編曲)の〈死と乙女〉をもっていましたが、シューベルトのお膝元のウィーンでは「シューベルトが全然ウィーン風ではなく、国家的区分を超えたところで作曲していたということがわかった」という批評が現地紙(Kurier紙)に載りました。これを受けて吉田初代館長は次のように語っています。「むしろ、ヨーロッパ人にとっても、いつもと違うシューベルトを聴くことによって新たな視界を切り開かれたと考える機会となるような演奏をすることこそ大切なのではないのでしょうか。それは繰り返しますが、違うだけではだめなのであり、『意味のある新しさ、違和感』を覚えさせる機縁にならなくてはならないのです。だが、そうなったとき、その演奏は、それをした演奏家にとってだけでなく、聴いた聴衆にとっても新しい経験、新しい価値観の獲得への道に通じることになるのです。日本人にはそれが求められているのではないかと思うのです。」(「理想の室内オーケストラとは 一水

戸室内管弦楽団での実験と成就」音楽之友社刊 2002年)

吉田秀和初代館長が魂を入れ、小澤征爾館長が大きく育てあげてきたMCO。その存在は30年の活動を通して「奇跡」と言われてきました。新しい価値観の創出を目指し、これからもMCOは音楽探求の道を歩み続けます。皆様の温かなご支援を、引き続きお願い申し上げます。

MCO創立30周年記念演奏会

2020年2月に、創立30周年を記念する第105回定期演奏会を開催します。30年の歩みを思い出に残る作品の数々とともに振り返ります。第1回公演の掉尾を飾ったチャイコフスキーの〈弦楽セレナード〉、吉田初代館長とMCOに捧げられたバルシャイ編曲の〈アイネ・クライネ・シンフォニー〉、指揮者無しの限界を突破したメンデルスゾーンの〈イタリア交響曲〉、そして、J.S.バッハの〈ヴァイオリンとオーボエのための協奏曲〉。この協奏曲で独奏を務めるのは、MCOの次代を担う豊嶋泰嗣さんとフィリップ・トンドゥルさんです。2人のインタビューを次頁から掲載しています。

■公演情報

水戸室内管弦楽団 創立30周年記念コンサート 水戸室内管弦楽団 第105回定期演奏会

2020.2.1(土)、2(日)両日15:00
S席¥7,000/A席¥5,500/B席¥4,000
U-25(25歳以下)¥2,000
楽団創立30周年特別ディナーセット券
(S席)¥10,000 [全席指定]

●プログラム

チャイコフスキー:弦楽セレナード 八長調 作品48より 第1楽章
J.S.バッハ:ヴァイオリンとオーボエのための協奏曲 BWV1060R(ヴァイオリン独奏:豊嶋泰嗣、オーボエ独奏:フィリップ・トンドゥル)
ショスタコーヴィチ(バルシャイ編曲):アイネ・クライネ・シンフォニー 作品49a
バルトーク:ルーマニア民俗舞曲集 Sz.68
メンデルスゾーン:交響曲 第4番イ長調(イタリア)

Interview with Yasushi Toyoshima

豊嶋泰嗣(ヴァイオリン)インタビュー

聞き手:高巢真樹



Photo:Michiharu Okubo

—豊嶋さんにとって、J.S.バッハはどんな存在でしょうか？

ヴァイオリニストにとって、J.S.バッハが書いた6つの〈無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ〉は避けて通れないレパートリーですし、一生付き合う作曲家という感じがですね。やってもやってもゴールがない。僕も5歳でヴァイオリンを始めたとき、最初に弾いたのはバッハのメヌエットでした。自分の中ではもう好き嫌いという基準は越えていて、さらに言うと、バロックとか古典派とか、そういう枠組みも越えた存在だと思います。例えばジャズの人もバッハをやりますし、その楽器のために書かれたわけではない曲も演奏でき、かつ、その音楽の素晴らしさは損なわれない。極端な話、駅のホームの音楽や着信音にも使える。世界中のあらゆるところに溶け込んでいる唯一の音楽家じゃないかな。

—J.S.バッハの魅力をどんなところに感じていらっしゃいますか？

ヴァイオリンのために書かれたソナタや、無伴奏の作品、ブランデンブルク協奏曲など、器楽曲の傑作はバッハがケーテンの宮廷楽長を務めていた時代に集中して書かれています。その頃、バッハのまわりにはたくさん的高手がいて、バッハ自身も楽器が弾けたことから傑作が量産されたと思います。僕はカンタータばかり書かれた初期の音楽に関わる機会は少ないですが、ケーテン時代の音楽はすごく魅力的。毎週のようにコンチェルトや器楽曲を書

いていたんですね。バッハは30代。脂がのっていただろうしね。今回演奏する〈ヴァイオリンとオーボエのための協奏曲〉も、その時代に書かれたのではないかと思います。

それから当時は今と違って演奏家と作曲家の間にはっきりした区別がなく、音楽家は演奏も作曲もするのが普通だった。だからバッハの音楽には「自分も演奏する人だったんだ」と感じられる部分があり、そこが魅力かなと思います。あとバロック時代のほとんどの作曲家は、楽譜に全てを書くわけではなく、通奏低音や旋律をどう音にするかは演奏家の自由に委ねられている部分があった。そんな時代にあってやはり、バッハの音楽は革新的だし、時代の先を走っていたと思います。

—ご共演いただくフィリップ・トンドゥルさんの印象は…？

本当に才能溢れる世代のトップの演奏家だと思いますし、日本的なものも理解してくれている。非常にフレン

ドリーで、みんなに愛されるキャラクターですね。

—豊嶋さんはMCOにおいて、楽団の大黒柱のような存在です。また各地のオーケストラでもコンサートマスターを務めていらっしゃいますが、MCOでその役割を担う時の感覚は、他の楽団とどんな違いがありますか？

これはオフレコかもしれないけど、ここのコンサートマスターは本当に仕事が多いです(笑)。メンバーは国内外で活躍していて、いろんな考えの人が集まるわけですから、意見がぶつかることがある。それはいいことでもあるけど、收拾がつかなくなることもあって。そういう面で、指揮者なしで音楽を作るのはいつもチャレンジングです。でも意見を言い合うのはこの良い特徴でもあるから、そのスタイルは保ちつつ、それを若い世代へとうまくつないでいけたらと思いますね。

でも音楽家にはいろんなタイプがあって、べちゃくちゃ喋らないで弾くタイプもいるんです。僕はどちらかというとそうで、できるだけ喋りたくない(苦笑)。もちろん考えていることは言わなきゃいけないけど、基本的にはお互いのやっていることを音で感じとるのが音楽家同士の対話だと思うので、言葉を戦わせるつもりは全くないんです。端から見ていると丁々発止言い合っている方が「やっている」ように見えるかもしれないけど、そういう表面的なところはどうでもいいかなと思う。もちろん、いろんな人がいてこそ面白いんですけどね。多様な意見がありつつもバランスがとれている状態を保っていければ、楽団として末永く続くと思います。

Interview with Philippe Tondre

フィリップ・トンドゥル(オーボエ)インタビュー

聞き手(Eメールにて):高巢真樹



—フィリップさんが初めてMCOに参加してくださったのは2010年。その後日本では東日本大震災があり、来日を控える演奏家も多い中、フィリップさんは2011年7月の演奏会にかけつけてくださり、心から感謝しています。これまで参加されたMCOの演奏会で、特に印象的な公演はありますか？

あの時は、MCOやマエストロ小澤、日本の友人やファンの皆さんのためにも、日本に来ることが大事だと思いました。音楽を通じて、未来への希望を届けたかったのです。MCOでのコンサートはどれも忘れがたく光栄な思い出です。それはまるで、空に輝く星や真珠のようで、どの経験も自分の中で生き、脈打っているのを感じます。でも一番感情が揺さぶられたのは、ベートーヴェン〈交響曲 第9番〉を演奏した第100回定期でしょうね。私もコンサート中に泣きました。全てが魔法のようでしたね！コンサートホールATMには、今もあの時の歓声と拍手の余韻が響いているように感じます。ありがとう水戸！私たちはみなファミリーです。どのコンサートも家族のコンサートのように感じています。

—フィリップさんは、シュトゥットガル

ト放送響やヨーロッパ室内管など名だたる楽団で首席奏者を務めています。MCOのユニークさはどんなところにあると思いますか？

MCOは、私がこれまで参加してきたどの楽団よりも優れています。それは、限られた時間で、質の高い演奏を成し遂げているからです。メンバーとは普段めったに会えないですが、それでも驚くべきクオリティを達成していると思います。MCOは規模こそ小さいですが、とても柔軟で反応がよく、距離感が近いので、コミュニケーションも早いのです。また私たちはお互いのことをよく理解しています。まさに「MCOはファミリー」なんですよ。小澤さんも望んでいることですが、私たちメンバー間の化学反応は素晴らしく、限界はありません。望めばどこまでだって行けると感じます！それを可能にしているのは、ホールやホテルのスタッフ、なじみの飲食店の店員さんや友人たちの温かいもてなしがあるからです。それにコンサートで子どもたちや家族連れの姿を見るのも嬉しくて。水戸に来ると「私たちができることなら何でもしてあげたい」と思うんです。そんな場所は世界のどこを見渡してもありませんよ。最近私は、ヨーロッパ室内管と

フィラデルフィア管のソロ・オーボエ奏者に任命されました。どちらも音楽家として素晴らしい幸せを与えてくれます。それでも水戸は変わらず、私の人生にとって特別な存在です。MCOは自分のキャリアで一番長く参加している楽団なので、どれだけ大切に思っているかをきっと分かって頂けますよね。

—今回ソリストを務めていただくJ.S. バッハの〈ヴァイオリンとオーボエのための協奏曲〉をご紹介しますか？またファンの皆さんにメッセージをお願いいたします。

オーボエと別の楽器のためのダブルコンチェルトというのはレパートリーが少ないので、バッハのこの作品はとても貴重です。バッハの作品で最も有名なもののひとつでもあり、いろんな場所でそのメロディを耳にします。駅やスーパーとか、最近では東京でエレベーターに乗っている時にも流れていてびっくりしました！演奏者にとっては挑戦しがいのある曲です。オーボエのパートはとても緻密に書かれていますし、正確さを保ちながら、しなやかに踊るように聴かせるにはとてもエネルギーを使います。第2楽章で決定的に大事なのはテンポです。この音楽にとってベストな形を探れたらと願っています。またヴァイオリンも同様に難しく、特に最後の楽章では難しいフレーズがたくさん登場し、それがあつたから別のパートへとつながっていくんです。いずれにせよ、全体の良いバランスや望ましいテンポが見つけられるようリハーサルに臨みたいと思います。皆さんにとって素晴らしいコンサートになりますように。そしてMCOに、ハッピー・バースデー！

音楽を通じてコミュニケーションの重要性を伝える トリオ・インク インタビュー

文・聞き手：鴻巣俊博



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン生誕250周年を記念して、1月24日の「ゆったりお昼にクラシック」(「ちょっとお昼に〜」の拡大版)ではトリオ・インクによるオール・ベートーヴェン・プログラムをお届けします。トリオ・インクは水戸室内管弦楽団のメンバーでヴァイオリニストの川崎洋介さんを中心に結成されたピアノ三重奏団で、クリエイティブなプログラムやユニークなステージに定評があります。水戸芸術館には今回が4度目の登場となる彼らにメールインタビューを行いました。

まずは川崎洋介さんに伺いました。
——「トリオ・インク」とは珍しい名前ですね。どのように名づけられたのでしょうか？また、ピアノのヴァディム・セレブリャーニさん、チェロのヴォルフラム・ケッセルさんとトリオを結成したきっかけは何だったのでしょうか。

もともと、ヴァディムとはジュリアード音楽院時代からの学友で、ヴォルフ

ラムとは一緒に仕事をする間柄でした。ヴォルフラムは私より10歳年上で、ニューヨークの音楽シーンで活躍する有名人でした。彼はあちこちで単発の演奏の仕事に私を誘ってくれました。ちなみに、私とヴァディムは、彼が私たちよりずっと年上であることをよくからかっているんですよ(笑)。ヴォルフラムとは2002年にとても親しくなりましたね。彼は卒にとらわれず世界中で活躍する団体として著名なマーク・モリス・ダンス・グループで仕事をしていて、私にも所属の話を持ち掛けてくれました。その頃、彼は定期的に共演してくれるピアニストを探していたので、私はヴァディムを紹介し、そこでこのトリオの原型ができたというわけです。私たちはシドニー・フェスティヴァルで演奏するためにオーストラリアへの旅を共にし、そこですぐに素晴らしい友達になりました。このおよそ18年間にわたる友情がこのトリオを素晴らしいものにしていると思います。

私たちのトリオはもともと他のアー

ティストと共演することを想定していたので、「トリオ+(プラス)」と名付けました。例えば「トリオ+川崎雅夫」というように、だれかの名前をプラスしてコラボレーションをする公演をしたいと思っていたのですが、それはなかなか実現しませんでした。実はトリオよりもデュオのコンサートをする人が多い時期があって、その時は「トリオ-(マイナス)だね」などと冗談を言っていました。

時代は流れ、インターネットが主な情報源になるにつれ、私たちのトリオ名は問題を抱えることとなりました。「トリオ+」と検索しても私たちの情報にはたどり着かず、「トリオ」と付く単語が出てくるのです。そうしてトリオ名を「トリオ・インク」と改めることにしました。そんなにいい名前ではないように見えるかもしれませんが、これは私たちがリハーサルでよく使う「インクを演奏しろ！(Just play the INK!)」というフレーズからとりました。文字通り、作曲家がインクで記した音符から逸脱しないような演奏をしよう、という意味です。

——トリオ・インクは2017年に続いて、水戸市内の全公立中学1年生を対象とした「中学生のための音楽鑑賞会」で演奏をされます。今回はベートーヴェンの生涯を演奏とナレーションで綴るステージ「ベートーヴェン：人間、音楽家、伝説」で劇団ACMの塩谷亮さんとの共演がありますね。水戸に限らず様々な場所で子どもたちに向けて公演し、俳優やアニメーションとのコラボレーションも行っています。このような活動を積極的にされている理由とは？

世の中の移り変わりの中で、クラシック音楽のような伝統的なものを保存すべきだというプレッシャーを前にも増して感じるようになっていますが、私たちはそれよりも基本的なことがあると思います。どの世代も、指先で簡単に操作できるテクノロジーによって社会性が失われつつあるため、「コミュニケーション」こそが私たちみんなが保存すべきものなのではないかと思っています。そういうわけで、トリオ・インクは音楽を通してコミュニケーションをしています。音楽にほんの少しの言葉や視覚を加えることで音楽への理解を深め、子どもたち（つまりは私たちの未来）にコミュニケーションをとることの重要性を忘れずにいてほしいと願っています。人と人とのコミュニケーションは、スマートフォンやコンピューターでは学べないことを教えてくれます。——同じ空間を共有し、同じ空気を吸う。目の前で繰り広げられている生のものを見て、聴く——そのようなことが今重要なのではないのでしょうか。

——今回の一般向け公演は「ちょっとお昼にクラシック」の拡大版、約2時間の「ゆったりお昼にクラシック」としてお届けします。この公演の後半では〈大公トリオ〉を演奏していただきますね。この曲は、川崎さんにとってどのような作品でしょうか。

〈大公トリオ〉を愛さない人がいまいしょうか！ これは難しい質問ですね。ベートーヴェンの作品は全てが傑作です。彼は常にハーモニーと形式の境界線を広げ続けてきました。〈大公トリオ〉はベートーヴェンの実験的な試みとして確実に最高ランクにあるといえるでしょう。彼はこの作品で楽器の使い方、そして楽器間のコミュニケーションの取り方も再定義していま

す。これほどのスケールをもつピアノ三重奏曲はかつて生み出されたことはないで、当時の聴衆はさぞ度肝を抜かれたことでしょう。この作品が特別な理由は、今も人々に感動を与え続け、さらにその感動の理由が何であるかが分からないという点にあります。これが、ベートーヴェンがレジェンド（伝説）であるゆえんです。彼は時代を超えるのです。

——続いて、チェロのヴォルフラムさんとピアノのヴァディムさんにそれぞれ伺いました。あなたにとってベートーヴェンはどんな存在ですか？

ヴォルフラム：ベートーヴェンは私が音楽家になった大きな理由の1つです。これほど後世に広く影響を与えた作曲家はいません。彼は革新的で、ルールを壊し、音楽の形式を広げ、音楽をロマン派の時代へと導きました。弦楽四重奏曲に関していうと、古典的な初期作品から記念碑的で力強い中期作品、そして時代を切り開き、奇跡的なまでの完成度を誇る後期作品までを順に演奏し、彼の足跡をたどることは音楽家として一番満たされる経験です。彼の音楽は感情、人生、精神、全ての面に語りかけてくるのです。

ヴァディム：私が子どもの頃、ピアノの先生に最初にしたお願いは「僕にベートーヴェンの曲を弾かせて」ということでした。その頃は彼の音楽を熟知しているわけではありませんでしたが、そのエネルギーと刺激はすでに私の心を捕えて離しませんでした。ベートーヴェンが作曲した32曲のピアノ・ソナタを演奏できたことは、私がピアニストとして達成しうる最も重要な業績だったように思います。何年も前、洋介と一緒に10曲あるベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタを1週間で演奏し

た時は、私の人生で最も誇らしい時間の1つでした。ベートーヴェンに対するイメージは、私が子どものころから大きく変わりました。昔は、気性が荒くて型破りで、極端に刺激的で暴力的ですらある音楽を書く人物だと思っていましたが、今はそれだけでなく、計り知れない創造性と焦燥感を持ち合わせた非常に複雑な人間であったと感じています。それは、彼が音楽の真理を求め続けて、作曲のスタイルを幾度も完全に変えていることから分かります。私は、交響曲第9番に心を奪われ、弦楽四重奏曲第15番やピアノ・ソナタ第32番の緩徐楽章に涙し、交響曲第7番を聴けば、150年前のヴァーグナーも言っているように、踊りたい気分になってしまいます。たとえ、何度聴いたとしても。なぜだか分かりませんが、これからもそうであり続けるであろうことは確信しています。

※インタビュー全文は当館ウェブサイトに掲載します。

■公演情報

ゆったりお昼にクラシック トリオ・インク

ベートーヴェン：人間、音楽家、伝説

2020.1.24(金) 13:30(15:20終演予定)
2,000円(1ドリンク付き) [全席指定]

●出演

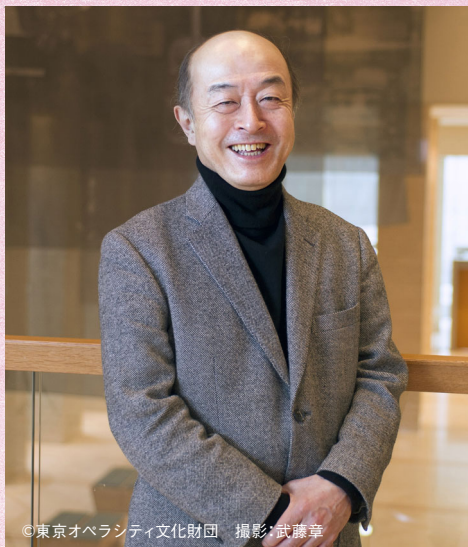
トリオ・インク
川崎洋介(ヴァイオリン)、ヴォルフラム・ケッセル
(チェロ)、ヴァディム・セリブリアニ(ピアノ)
ナレーション：塩谷亮(劇団ACM)

●プログラム

第1部『ベートーヴェン：人間、音楽家、伝説』
ピアノ三重奏曲第5番 二長調 作品70の1(幽霊)
ヴァイオリン・ソナタ第5番 へ長調 作品24(春)
ピアノ・ソナタ第30番 ホ長調 作品109
などより抜粋
第2部 ピアノ三重奏曲第7番 変ロ長調 作品97
(大公)

音楽との出会い、作曲家への道、すべて水戸から始まった 池辺晋一郎(作曲) インタビュー

文・聞き手:中村 晃



©東京オペラシティ文化財団 撮影:武藤章

第二次世界大戦後に活躍した作曲家に焦点を当て、その創作の軌跡を辿る「作曲家の肖像」シリーズ。今回は、水戸芸術館の開館以来、企画運営に参画していただいている水戸出身の作曲家・池辺晋一郎さんの室内楽作品を特集します。出演は、水戸室内管弦楽団名誉楽団員でフルート奏者の工藤重典さんやソプラノの小林沙羅さんなど、池辺さんが信頼を寄せる豪華な演奏家たちが揃いました。

このたび、池辺さんは水戸市文化栄誉賞を受賞され、贈呈式が2019年11月29日に水戸芸術館ACM劇場で行われました。その贈呈式の後にお話を伺いました。

——池辺先生は、水戸に生まれ、幼少時代を水戸で過ごされています。音楽との出会いも水戸だったのでしょうか？

その通りです。母親のピアノが家にあったということ、僕は体が弱くて、戸外で遊べなかったからピアノで遊んでいたということの2つが原点ですね。体が弱くて小学校に行けずに、ひがな寝ていた小学校浪人の1年間で、おほ

きな転機でした。寝ていて外で遊べないから、ピアノで遊ぶ。もし体が丈夫だったら、きちんと習ったであろうピアノを、でたらめで弾くしかなかったのですが、そのでたらめというのが、作曲につながっていくわけです。ある時、僕が弾いたでたらめを、うちにピアノがあったからよく遊びに来ていた大学生が、楽譜に起こしてくれたんです。そしたら僕は楽譜という遊びを覚えてしまった。その大学生が、ノートに定規で5本線を引いて、音符を書いていたから、僕もそういうものかと思ってしまった。今でも1冊だけ残っていますよ、自分で5線を引いたものが。五線紙というのがあることを知らなかったんだね。

——作曲家を目指そうとお考えになったのは、いつの頃でしたか。そのきっかけは何ですか。

最初は全然、目指してなかったです。ただ一番大好きな遊びで、もうずっと毎日、曲を作っていて、次第に膨大な量になっていきました。それで水戸が関係するのですが、ちょうど、水戸の祖父母の家に遊びに来ていた高校1年の終わりの春休みに、水戸に当時、東京芸術大学の作曲科の4年生で、しかし、もう社会人を経験したという、かなりの年齢の先生(藤島昌寿氏)がいて、その先生のところに、母方の祖父が祖母が忘れましたが、風呂敷に包んで僕のでたらめを持って行ってしまったのです。そうしたらその先生から呼び出されて、こんなでたらめを書いては駄目だから、勉強しろと言われ、その場で池内友次郎先生というかたに電話

されて、それで突然、東京芸大を受けると言われて、専門家を目指すことに強制的にさせられてしまったのです。

——今回の演奏会では、創作初期の1960年代の作品から、まさにこの演奏会のために書き下ろされた最新の作品まで、池辺先生の創作の軌跡を辿るプログラムとなっていますが、池辺先生ご自身が、これまでの創作を振り返られて、お感じになっていることをお聞かせください。

2つのエレメント(要素)があると思っています。ひとつはハンスリック(ウィーンで活躍した音楽評論家 1825 - 1904)の音楽美論ではないけれど、純音楽というか、まったく音だけで勝負する世界。「ストラータ」というシリーズがそれにあたります。「ストラータ(strata)」というのは、「地層」を意味する「ストラトゥム(stratum)」の複数形ですが、要するに楽器の音域を地層に見立てています。楽器が持っている音域というのは、いわばその楽器の人格、つまりキャラクターであると捉え、それに焦点を当てたのが「ストラータ」というシリーズです。今回水戸で初演する〈ストラータXIII〉はフルートとクラリネットのための作品です。フルートとクラリネットのそれぞれの音域というのは数度ズレています。フルートの最高音の方が5度か6度上まで出るし、下は逆にクラリネットが5度か6度フルートよりも低くまで出る。しかし、この2つの楽器は、ほぼ同じ音域をカバーしている。その地層＝音域による、音の世界を描きたいと思っています。

それから、たとえば、今回のプログラムの中に〈君は土と河の匂いがする〉とか〈大地は蒼い一個のオレンジのよう

な…」など、これらは僕の好きな詩の一節です。〈君は土と河の匂いがする〉はレミ・ドゥ・グルモンの詩の一節、〈大地は蒼い一個のオレンジのような…〉はエリュアールの詩です。詩が好きなので、詩からヒントを得るといえる、世界が見えてくるということがよくあります。先ほどの〈ストラータ〉とは逆に、音以外の想念を音に託すというのが、もうひとつのエレメントです。〈ギターは耐え、そして希望しつづける〉というのもその一つです。僕はナチのホロコーストがあった収容所に行ってきましたが、アウシュヴィッツへの訪問のあとにテレゼンというプラハ郊外の収容所へ行った時に、手作りの楽器が展示されていました。それはヴァイオリンでしたが、鈴木大介君に作曲の依頼を受けた時に、ギターも収容所で手作りした人がいたに違いないと思い、そういう手作りの楽器ではあるが、そこから光が見えてくるという想いが、僕にこの曲を書かせました。ドラマや映画の音楽をたくさん書いてきたことと関わると思うのですが、音と何か別の想念を重ねるといって世界が、僕は自分の中にあると思っています。音符を書いていることが、あたかもドラマを書いているかのように感じられることがよくあります。音がたとえばどこへ行きたい、ここへ行きたいと登場人物のように言ってきて、それを操作していると別の音と出会ったときに何か軋轢が起こったりするという、一編のドラマのような気がするのです。そういう癖というか、想念の組み合わせ方のシステムというものがあります。

—今回の演奏会で取り上げられる作品について、色々とお話くださいましたが、まだ触れられていない歌曲について、ご紹介ください。

先ほどお話ししたように、音とドラマというのは自分の中でとても強い関わり

を持っており、それと同一線上に歌曲もあります。先ほども言いましたが、僕は詩が好きで、僕の書棚は様々な詩集ばかりが並んでいます。歌を書くというのは、僕の中では必然的な道筋ですね。詩にアプローチすることから歌が生まれてくる。今度の2月のコンサートの少し後に、僕の歌曲集が全音楽譜出版社から出版されます。今回の演奏曲は、その歌曲集にすべて収められています。たとえば茨城出身の詩人ですけれど新川和江さんの詩には、たくさんの歌曲を書きました。〈恋する猫のセレナーデ〉と〈バラ泥棒〉はなかにし礼さんの詩ですが、なかにしさんはクラシック音楽に滅茶苦茶詳しい人で、一緒に数多くの仕事をしてきました。それから、もちろん谷川俊太郎さんともたくさんご一緒させていただいています。そういう好きな詩で書いた結果の曲が、今回のプログラムとして並んでいます。どうしてそんなに詩が好きかとよく聞かれるんですけど、その答えは簡単なんです。僕はしがない作曲家だからです。ないものねだりで、詩が好きなんです(笑)。

—池辺先生は、1990年の開館時から、水戸芸術館の活動に関わり、音楽部門の運営にご助言いただいたり、「現代音楽を楽しもう」シリーズや近年の「クリスマス・プレゼント・コンサート」など数多くの企画を実現してくださったりしています。水戸芸術館の30年間の活動ついて、どのようなご感想をお持ちですか。

水戸芸術館には、建設時からヘルメットを被って中に入っています。充実した活動で歳月を重ねてきて、30年経った。素晴らしいと思います。当初から、水戸芸術館が優れているのは、音楽ホールだけではなくて演劇と美術という3つの側面を併設させているとこ

ろだと思っていました。その考えは今でも変わりなくて、この3つが連動しているということが、水戸芸術館の特質を形作っているのだと思います。しかも、室内管弦楽団と劇団がある。子供の頃、水戸にこんなものができるとは予想もしていなかったですからね。とてもありがたいと思いますね。どんどん先鞭をつけ過ぎたくらいの存在だから、これからも全国の文化行政を先導して欲しいと思います。

—最後に水戸の聴衆に向けて、メッセージをお願いします。

水戸の音楽愛好家の皆さんが水戸芸術館を育てていると同時に、水戸芸術館が愛好家の皆さんと歩みを一緒にして、お互い育てあっていると思います。かつて、弘道館には音楽という学問があった。水戸というところには、たとえば光圀公だって副将軍と言われながら、一方で大日本史を編纂した背景があるのです。そういう土地の人たちは文化をたしなむ風土が、体の中の当然の血肉となっているはずだと思います。是非、そういうことを自負して、芸術館とともに歩んでいただきたいと思うし、それでこそ水戸市民であって欲しいと思います。

※インタビュー全文は当館ウェブサイトに掲載します。

■公演情報

池辺晋一郎の肖像

2020.2.8(土)

16:00(オルガン・ブレ演奏15:40)

一般¥3,000

U-25(25歳以下) ¥1,000 [全席指定]

●出演

池辺晋一郎(おはなし)、小林沙羅(ソプラノ)、大萩康司(ギター)、工藤重典(フルート)、亀井良信(クラリネット)、河野祐子(ピアノ)、カルテット・エクセルシオ(弦楽四重奏)、長田真実(オルガン)

●プログラム

大地は蒼い一個のオレンジのような…
ギターは耐え、そして希望しつづける
歌曲〈恋する猫のセレナーデ〉(詩: なかにし礼)
クインクヴァランス II
ストラータXIII <水戸芸術館委嘱新作> ほか

ドン・ジョヴァンニの悲劇 ～時代が味方しなかった誘惑者の最期～

文・関根哲也



Max Slevogt
Der Saenger Francisco d'Andrade als Don Giovanni in Mozarts Oper

2月24日(月・振休)に開催される河原忠之の《水戸 de Opera!》Vol.3のメイン・プログラムは、モーツァルトのオペラ《ドン・ジョヴァンニ》のハイライトです。

スペインの伝説的な人物ドン・ファン(ドン・ジョヴァンニはイタリア語読み)は放蕩の限りを尽くし、誘惑された娘を助けにきた騎士長を殺してしまいますが、生き方を改めようとはしないため、ついに騎士長の石像によって地獄に連れ去られる、という物語。《フィガロの結婚》や《コジ・ファン・トゥッテ》も手がけたダ・ポンテが台本を書いています。

モーツァルトの付けた音楽の素晴らしさについては様々な媒体で触れていますし、コンサート当日も存分にお楽しみいただけますので、ここでは筋書きの興味深いポイントに焦点を当ててみましょう。

カタログの歌

ドン・ジョヴァンニの従者レポレッロが歌う有名なアリアをご存じでしょうか。“カタログの歌”と言われるアリアで、主人ドン・ジョヴァンニがこれまでものにしてきた女性の数を正確に記録したカタログを読み上げます。

“イタリアでは640人、ドイツでは231人、フランスでは100人、トルコでは91人、さらにスペインではすでに1003人...”

合計すると2065人という途方もない数字

になります。男性としてはうらやましさを乗り越し、尊敬の念すら抱えていますね。と言うのも、この数字の裏には女性の選り好みなど一切しないドン・ジョヴァンニの“博愛”の精神さえ読み取れるからです。

“金があろうと、醜かろうと、美しかろうとお構いなし。スカートさえはいていれば、旦那はそれでよかったんです...”

レポレッロはこの武勇伝を、こともあろうにドン・ジョヴァンニに棄てられ、しかも未練がましくこの色男を追い続けているドンナ・エルヴィーラに歌って聴かせます。自分が2065分の1の存在でしかないことを知ったエルヴィーラの心境は如何ばかりだったでしょう。

真相は闇の中? ドンナ・アンナ

そのレポレッロがカタログに記載したのかどうか、ちょっと事実関係が

つかみづらい事件が、オペラの幕開きで起こっています。騎士長の娘ドンナ・アンナを手籠めにしようと、ドン・ジョヴァンニが夜の間に紛れ、彼女の部屋に忍び込んだのです。幕が開くとすぐ、ドンナ・アンナが誘惑者の正体を暴こうと必死に抵抗する場面となります。

ドンナ・アンナの部屋で、彼女とドン・ジョヴァンニの間に何があったのか。すなわち、ドン・ジョヴァンニは首尾よくことを成功させたのか、失敗したのか。オペラの台本では、実は明確に語られることはありません。レポレッロのカタログにある“スペインでは1003人”の中にドンナ・アンナが含まれているのかどうか、はっきりしないのです。

ロマン派の奇才E.T.A.ホフマンが1814年に発表した小説「ドン・ジュアン」では、ドンナ・アンナはドン・ジョヴァンニに凌辱されたことになっています。ドン・ジョヴァンニにはロマン主義的な奔放な芸術家像が、ドンナ・アンナには純潔を捧げる救済者としての女性像が、それぞれ投影されました。フランス革命後に新たに誕生した「市民」の求める抑圧からの解放が、E.T.A.ホフマンの小説の中に巧みに描かれているのです。

オペラ《ドン・ジョヴァンニ》の演出においても、以来、ホフマン的な解釈が主流となっていました。それに敢然と異を唱えたのが、ベルリン・コーミッシェ・オーパーの設立者であり、高名な演出家でもあるヴァルター・フェルゼンシュタイン(1901~1975)です。フェルゼンシュタインは、簡単に言ってしまうと、ドン・ジョヴァンニが凌辱することなどあり得ない、それ

はこの稀代の色事師の主義に反するものだ、と唱えました。

どちらの説も一理あります。日本で発行されているオペラの解説書などでは、ホフマン的な解釈を採っている文章がやや多いかな、という印象です。

ドン・ジョヴァンニの凋落

筆者が注目すべきと考えるのは、この二人の肉体関係が実際どうだったかということより、ドン・ジョヴァンニがドンナ・アンナを結局「落とせなかった」という事実です。ドンナ・アンナは心のどこかでこの誘惑者に惹かれていてと捉えることも可能ですが、彼女の復讐の誓いはぶれることがありません。どのような女性でもあらがえない魅力を持っているはずのドン・ジョヴァンニが、ドンナ・アンナの心を完全に奪うことはできなかったのです。2000人以上の女性を相手にしてきたエロティシズムの権化にして、人生初の“失敗”だったかも知れませんが。

これを境に、ドン・ジョヴァンニの栄光は急速に輝きを失い始めます。ドンナ・アンナの父・騎士長を不用意に殺してしまう。ドンナ・アンナの次の標的をすぐに見つけ「しめた!」と思ったら、昔棄てた女性であるドンナ・エルヴィーラと見間違える。村娘ツェルリーナを口説いている最中に、またもエルヴィーラに出くわし水を差される。正体がばれていなかったドンナ・アンナに声で犯人だと気づかれてしまう…。

“どうも今日は悪魔がお楽しみらしい。事を首尾よく運ぶ邪魔に出おって。何もかもまづい成り行きだ…”

ドン・ジョヴァンニは独白します。いつもうまくいくはずのことが、うまくいかない。なにかおかしいと感じ

つも、ドン・ジョヴァンニは自らの流儀を変えようとはしません。騎士長の石像の前にやってくると、不遜にも晩餐会に招待します。「悔い改めよ」と迫る石像に対して、最後まで顔がなかったドン・ジョヴァンニは、ついに地獄の業火に呑み込まれてしまいます。

時代の予言者、モーツァルト

なぜドン・ジョヴァンニは急速に魅力を失ってしまったのでしょうか。なぜ女性をたやすく落とせなくなってしまったのでしょうか。そのわけを知るには、モーツァルトとダ・ポンテが選んだオペラの舞台設定(時と場所)がキーになると私は考えています。

ダ・ポンテの台本では「スペインのある町」となっています。「時は16～17世紀、場所はスペインのセビリャ」とする研究者も少なくありませんが、台本やスコアにはそのような記述は見当たりません。ダ・ポンテとモーツァルトは敢えてあいまいな舞台設定を選び、観客を幻惑させ、伝説上の人物ドン・ファンを自分たちの時代へとよみがえらせた、と見るべきでしょう。

極めつけは第2幕のフィナーレ。ドン・ジョヴァンニが騎士長を招く晩餐会の場面で、モーツァルトは実に巧妙にこのオペラの舞台を現代へとすり替えてしまいます。ドン・ジョヴァンニがお抱えの楽士たちに当時流行の音楽を演奏させるのですが、そのうちの1曲が〈フィガロの結婚〉から“もう飛ぶまいぞ、この蝶々”。〈ドン・ジョヴァンニ〉と同じ初演地プラハで1786年に大ヒットとなった自作オペラの旋律を登場させることで、ドン・ジョヴァンニを「今ここに生きている人物」に変身させてしまったのです。

オペラ〈ドン・ジョヴァンニ〉の初演

は1787年10月。ヨーロッパを大きく揺るがすことになるフランス革命は、1789年5月に迫っています。モーツァルトは、時代の動きを敏感に察知していたとは言えないでしょうか。

“スカートさえはいていれば”どんな身分の女性でもお相手した貴族ドン・ジョヴァンニのエロティシズムによる“博愛”は突如として色褪せ、代わって市民による「自由・平等・博愛」の精神が地中に根を張り、一気に芽吹くのを待っていたのです。その時代の移り変わりを音楽で予言したのが〈ドン・ジョヴァンニ〉である、と解釈することもできそうです。



2019年2月 水戸 de Opera! Vol.2の様子

■公演情報

河原忠之の 《水戸 de Opera!》Vol.3 ドン・ジョヴァンニ ～モーツァルトとドイツ歌曲&アリア

2020.2.24(月・振休) 16:00

一般 ¥4,000/

U-25(25歳以下) ¥1,500 [全席指定]

●出演

河原忠之(ピアノ)
佐藤美枝子(ソプラノ)
林美智子(メゾ・ソプラノ)
望月哲也(テノール)
黒田博(バリトン)

●プログラム

ドイツ歌曲から
ドイツ・オペラの名アリア
モーツァルト:〈ドン・ジョヴァンニ〉ハイライト

今までのレパートリーを大切にしつつ、続く挑戦 砂川涼子(ソプラノ) インタビュー

文・聞き手: 鴻巣俊博



日本を代表するプリマドンナの1人として輝きを放ち続けるソプラノ歌手・砂川涼子さんが3月19日の「ちょっとお昼にクラシック」に登場します。宮古島で過ごした子供時代、今回のプログラムについて、そしてオペラ歌手としてどのように役に向き合っているのかを伺いました。

——**沖縄・宮古島ご出身の砂川さん。どのような子供時代を過ごされたのでしょうか。**

周りの子に比べれば肌の色は白い方でしたが、それでも小麦色に焼けていました。ショートカットで活発な子供でしたね。小さいころは元気いっぱい駆け回っていました(笑)。小学校では、担任の先生が合唱部で歌うことを推薦してくださったことがきっかけで、小学6年生まで合唱部に所属していました。中学校に入ると、歌から離れて吹奏楽部に入学しました。身体は小さかったのにコントラバスをやっていたんですよ! 他の女の子たちの間では

フルートやクラリネットが人気だったのですが、私は弦楽器に惹かれてコントラバスを自分から選びました。低音も素晴らしいし、他に希望者がいないのですぐに決まりましたしね(笑)。いざ弾いてみると、チューバの音が大きくて全然聞こえないんですけど、その存在感到惹かれて3年間吹奏楽コンクールにも情熱を燃やしました。高校でも吹奏楽部に入ってホルンを担当したのですが、この頃音大に進もうと思い始め、受験準備のためにホルンは1年で辞めてしまいました。今振り返ってみると、音楽漬けの宮古島の子供時代でしたね。

——**宮古島で子供時代を過ごしたということが、今の歌手としての砂川さんに影響を与えたことはありますか?**

宮古島は芸事が盛んで、三線の音や民謡を歌う声など音に囲まれて育ったということは大きかったと思います。父は音楽が好きで、エレクトーンやギターを趣味で弾いていました。で

も決して音楽一家だったというわけではなくて、私が音大受験の勉強をするまで家にピアノもなかったのです。もともとは学校の先生になるために音大に入学したので、私が声楽家の道に進むと決めたとき家族は驚いていましたね。オペラは音大に入るまで観たことすらありませんでした。初めて観たのは大学内で先輩たちが出演したオペラ公演で、ドイツ人の演出家が付いて、オーケストラもいるという本格的なものでした。その時は「先輩たちの声凄いなー」とは思いましたが、まさか将来自分がオペラに出たり演技をしたりするなんてことは全く考えていませんでした。学校の先生になるために勉強していたのですが、大学4年生の時、教育実習をした時「先生って大変だなあ…」って思ってしまったんです。毎日歌以外で大きな声を出さなくては行けないし、テンションの持って行き方も…私にはちょっと無理かな、と感じて、歌の勉強を続けようと思い大学院を受験しました。このころからやっと歌の道に進もうと思い始め、いろいろなご縁に恵まれて今の私があります。

——**今回のプログラムについて伺います。沖縄の曲と日本歌曲を2曲ずつ選曲くださいました。**

最初の2曲はどちらも沖縄では有名な曲で、〈芭蕉布〉は標準語ですが〈ていんさぐぬ花〉は沖縄の言葉で歌います。“ていんさぐぬ花”というのはホウセンカの花のことで、親の教えを歌ったとてもいい内容です。日本歌曲はまずは春らしい曲ということで小林秀雄の〈すてきな春に〉を歌います。この曲はアリアに近いような華やかな曲で、題名の通りすてきな春を感じ

ることができる曲です。中田喜直の〈霧と話した〉は対照的にしっとりとした曲調で、言葉とメロディがぴったり寄り添っている大好きな作品です。沖縄の曲も日本歌曲も、皆さんに聴いていただきたい素敵な曲がたくさんあるので絞り込むのが大変だったのですが、その中でも特に聴いていただきたい曲を2つずつ選びました。

——ブッチーニのオペラからは3つのアリアをお選びいただきました。特に《ラ・ボエーム》のミミは砂川さんの最大の当たり役ですが、今回は2曲あるミミのアリアの中で比較的コンサートで歌われる機会が少ない第3幕のアリアを選ばれました。

今回歌う第3幕のアリアは、恋人のことを愛しているながらも別れを切り出す歌なのですが、恨みつらみを歌うわけではなく、春が来れば太陽と一緒に居てくれる、というような前向きな場面です。ミミは自分が不治の病を患っていることを自覚しているので、この前向きさが逆に切なさを感じさせます。第1幕の“私の名はミミ”もそうですが、ミミのアリアは語るように歌われるのが特徴的です。その次に歌う《トゥーランドット》のリューは、愛する人の幸せのために自分の命を捧げるという自己犠牲の極致のような役で、今回歌うアリアはまさに自ら命を絶つ直前に歌われる曲です。

——ミミもリューも長年歌われているレパートリーですが、ここ数年《トスカ》の題名役など今までとは違った役に挑戦されていますね。そのきっかけは？

基本的にはレパートリーを変えているわけではなく、今まで歌ってきた役がベースにあります。その上で時々挑戦的な役に挑んでみようと思って2017年

と19年にオーディションを受けて《トスカ》を歌いました。このオペラは他のドラマティックな作品よりもさらに演劇的要素が強い作品なので、“演じる”という面でもとても興味のある役だったのです。声楽的には気を付けて歌わないと声を壊してしまう危険もあるので、それをしっかり理解してくださる演出家、指揮者、共演者の方に恵まれて無事に歌うことができました。演出家・栗国淳さんは演じることに対して高いクオリティを求め「オペラに出演するのであれば女優であれ」という考え方からとても刺激を受けましたね。不思議なことに、挑戦的な役を演じたあとにはいつもの役、ホームに戻されるという何かの力がはたらいているようで、《トスカ》の後は2回とも《カルメン》のミカエラを歌う機会をいただきました。どんどんドラマティックな役に行きっぱなしということがないので喉にも負担が少ない状態を保っています。今回最後に歌う《蝶々夫人》はまだ舞台で全曲歌ったことがありませんが、今後歌う可能性があるかな、と思っています。数年後、歌う機会をいただいた時に急に勉強を始めるのは大変なので、今から少しずつ歌い始めています。

——ブッチーニのオペラのヒロインには共通する部分があるように思います。砂川さんがそれらの役を歌い、演じる時に意識されていることはありますか？

ブッチーニのオペラの中でも、私がレパートリーとしているミミやリューは、控えめで健気、前にどんどん出るような人物ではありません。しかし、柔らかくておとなしい中でも、芯の強さがある役なのです。そのような役が私の気質や声にとってもよく合っていて、意識して役作りをすることなくナチュラルに演じることができています。一

方で《トスカ》のように、激しい性格表現の中にもやきもちを焼いたりすねたりする役は、演出家や共演者に助けられて演じることができました。「私だったらここでやきもちを焼くかな？」と思うこともありますし(笑)。ミミやリューや蝶々さんは「私もこう思うかも」という場面が多い分、想いがあふれ出て稽古中に涙が出てしまうことがあります。泣いてしまうと歌えなくなってしまうのでよくない事なのですが…。でも稽古で感情を放出することにより、泣くということを通り越したところにいるようで、本番では緊張感もあいまって上手く感情をコントロールできています。

——今回共演されるピアニストの仲田淳也さんとは過去にご共演されたことは？

仲田さんには私が出演したオペラ公演の副指揮者として支えていただいたこともありますし、コンサートで何回かピアニストとして共演いただいたことがあります。アレンジもお上手で、指揮者としてもご活躍されているので、歌手の呼吸を感じてくれるとても歌いやすいピアノを弾いてくれます。イケメンですしお客様も喜ばれるのではないのでしょうか(笑)。

※インタビュー全文は当館ウェブサイトに掲載します。

■公演情報

ちょっとお昼にクラシック
砂川涼子(ソプラノ)
春の訪れ ～Primavera～

2020.3.19(木) 13:30
1,500円 [全席指定]
ランチペアセット券 6,000円
(数量限定・先着順)

●共演 仲田淳也(ピアノ)
●プログラム
普久原恒男:芭蕉布
ていんさくぬ花(沖縄民謡)
小林秀雄:すてきな春に
中田喜直:霧と話した
ブッチーニ:オペラ《ラ・ボエーム》より“あなたの愛の呼ぶ声に”
オペラ《蝶々夫人》より“ある晴れた日に” ほか

合唱セミナー2020 講師：田中信昭 ベートーヴェン・イヤーに、あらためて学ぶ〈第九〉

文：篠田大基



「合唱セミナー2014」より

合唱指揮者・田中信昭氏。1928年生まれ。東京芸術大学で声楽家マルガレーテ・ネトケ＝レーヴェ（1884～1971）に師事し、卒業時に同窓生と、戦後日本のプロ合唱団の嚆矢となる東京混声合唱団を結成。以来日本に合唱音楽を広めてきた、人呼んで「合唱の神様」。470曲以上の合唱作品を初演し、92歳の今も現役でご活躍です。

2月16日（日）の「合唱セミナー2020」は、その田中信昭氏を講師にお招きして開催します（茨城県合唱連盟、茨城県高等学校文化連盟、茨城県高等学校教育研究会音楽部との共催）。今回の講習曲は、ベートーヴェン生誕250年の記念の年にふさわしく、かの「歓喜に寄す」——交響曲第9番第4楽章です。

日本人が〈第九〉を初めて演奏したのは、今から約1世紀前の1924（大正13）年でした。その年の11月29日に、東京音楽学校（現・東京芸術大学）のオーケストラと合唱が全曲演奏を成し遂げています。当時の日本でベートーヴェンの交響曲は、未だ演奏の難しい作品でした。それが今では〈第九〉が日本の年末の風物詩となり、全国各地で歌われるようになっていきます。水戸でも毎年、野外コンサートの「300人

の〈第九〉」を開催しています。1世紀の間の変化には驚くばかりです。

〈第九〉は決して簡単な曲ではありません。1924年の東京音楽学校による〈第九〉の合唱に参加し、後に声楽家になった木下保（1903～1982）の回想によると、当時の合唱隊は1年がかりの猛練習を重ね、それでも満足に歌えず、テノールは全然出せない高音域をがなり叫んでどうにか本番を歌い切ったという始末だったようです。しかも〈第九〉の歌詞はドイツ語です。「外国語の歌詞の意味など分からなくてよい」という風潮が当時はあったらしく、それは戦後、プロアマを問わず沢山の人が〈第九〉の合唱に挑戦するようになってからも、なくなっているかもしれません。感動的な“Alle Menschen werden Brüder（全人類がアレーメンシェン兄弟になる）”の詩句が「ああ冷麺支援ベル出ん 鯉うでる」となっている（これは戦後、合唱団員のために本当に作られた翻案）、これでは台無しなのです。

田中信昭氏はこう語っています。「歌というのは、言葉や詩が作曲家によってどう感じとられて音楽にどう姿を変えたのかが大事です。そこをいい加減にしたまま演奏するようでは、曲の本質に迫ってゆけないし、言葉の意味をわからずに外国語でただ歌うというのでは仕様がなし。歌は、音楽と言葉が一体化してこそ芸術です。」（『サライ』2017年2月号、p.17）

田中氏は著書『絶対！うまくなる 合唱 100のコツ』（ヤマハミュージックメディア、2014年）のなかで、〈第九〉の

「歓喜の歌」の詩の一語一語の意味を踏まえて、それがどんな音の動きに移し変えられているかを解説しています。まるで一音一音の律動が、この詩を読んだベートーヴェンの心の動きを映し出しているかのような、それはじつに生き生きとした解説です（合唱がお好きな方はぜひ読んでみてください）。「ベートーヴェンの心情に思いを馳せると、演奏者の私たちは何をすべきかがわかってきます。詩の意味をしっかりと把握して、いまの世の中に向かってこの曲で何を訴えるのかを、歌う一人ひとりの意思として演奏に表さなければなりません。」（『絶対！うまくなる 合唱 100のコツ』、p.101）

「作品の意味を歌うのが声楽」——徹底してそのように田中氏に教えたのが、大学時代の師、ネトケ＝レーヴェだったそうです。彼女は1924年11月に東京音楽学校に着任。〈第九〉が演奏された11月29日の東京音楽学校の演奏会が彼女の日本での初舞台でした。〈第九〉の合唱指導にも携わったはずですが、しかし声を張り上げるのに精一杯の合唱隊に、〈第九〉の意味はどこまで伝えられたでしょうか。残念ながら首を傾げざるを得ません。

翻って、1世紀後の私たちはどうでしょうか。〈第九〉の詩の意味をかみしめ、「合唱セミナー」で田中信昭氏の指導の下、あらためてその音楽の魅力を感じてみませんか？

■公演情報

合唱セミナー2020

2020. 2.16（日）10:00（16:00終了予定）
一般¥1,000/高校生¥500/
中学生以下¥300 ※未就学児入場不可

●講師：田中信昭（東京混声合唱団桂冠指揮者）

「ブンカ」と「ゲージュツ」のはなし

その4 芸術の終焉

文：中村 晃

ヘーゲルは、精神的 content と感性的形態の統一が成し遂げられている古代ギリシアの古典的芸術こそ「美の頂点」であり、芸術の本質は絶対者（＝神）の表現であると考えた。それに続くロマン的芸術は、内容と形態との統一を解消しているがゆえに、「美の頂点」からは転げ落ちた存在である（ヘーゲルの用いる「古典的」「ロマン的」というのは、一般に言われている「古典主義」「ロマン主義」とは重ならない点で注意が必要だ）。しかし、キリスト教徒にとっての絶対者（＝神）は感性的直観を超えたものであるがゆえに、ロマン的芸術は、感性的直観に拘束されつつもそれを超えた「内容」を求めるといって、古典的芸術よりも「高次」なものへと進歩したと捉えられる。しかし、この同じ事態から「芸術の終焉」という命題が引き出されることになる。前回に引き続き、小田部胤久氏の「ヘーゲル美学における芸術の新生と終焉」（世界思想社 2001）における論考を基盤にして、ヘーゲルの思想を紹介したい。

「かつては芸術こそ絶対者を意識するための最高のやり方であったが、今日の世界の精神、より詳しくはわれわれの宗教とわれわれの理性的教養の精神は、そうした段階を超え出たように思われる。芸術制作とその作品に固有の特質は、われわれの最高の欲求を満たさない。われわれは、芸術作品を神として崇拜しあがめよう段階を超え出た。（中略）われわれのうちに喚起するものは、より高次の試金石によって吟味され、他の側面から[概念によって]真理性を保証される必要がある」（ホトー編纂『美学講義』1835-38）。ヘーゲルの「芸術終焉論」は、古代ギリシアからキリスト教世界への移行における絶対者の

変容が、絶対者の表現として芸術を捉える限りにおいては、芸術を過去のものにしたという考察である。そして、ヘーゲルは、絶対者の把握は本来的には概念的・哲学的に為されるべきであって、芸術という感性的媒体を通して為されるものではないとして、前回紹介したシェリングを批判する。

そして、ロマン的芸術は、内容と形態の統一を解消しているために、偶然的な形態を受け入れるようになる。「ロマン的芸術は、外面性がそれ自体で自由に自ら振る舞うに任せ、この点で、花や木やごくありふれた家具にいたるまでありとあらゆる素材を、定在の自然的偶然性においてなんら妨げられることなく表現のうちに取り入れることを認める」（前掲書）。そして、ヘーゲルによれば、ロマン的芸術が発展するにつれて、芸術家はますます自然的偶然性に対して関心を寄せ、一方で本来表現すべき内容を忘れ、ただ自然的偶然性を描写することに専心するようになる。これは、芸術の世俗化を意味し、ここに「ロマン的芸術の崩壊」が生じる。ヘーゲルが念頭に置いたのはオランダの静物画・風俗画である。ここで描かれる対象はそれ自体としては価値を持たない事象であるために、「表現の手段は、対象から離れて、それ自体が目的となり（＝自己目的化）、その結果、芸術の手段を芸術家が主体的に巧みに操ることができるといえる、ということが芸術作品の客観的目標となる」。

ここにおいて、何を表現するか、いかに表現するかが、個々の芸術家の創意に委ねられ、芸術にとっての真の自由が可能になる。このようにして、「芸術は、一定の範囲の内容や[その内容の]捉え方に固く制約されていた状態から抜け

出て、人間的なもの——すなわち、人間の心情の深みと高み、人間の喜びや悩みにおける、あるいは人間の努力や行為や運命における普遍的人間性——を自らにとっての新たな聖域とする」（前掲書）。そして、キリスト教世界において飛躍的な発展を遂げた音楽について、ヘーゲルは、「内的な自己が内面的な主観性および観念的な魂に従って自身の内部で運動する様式を再現（鳴）させる」（前掲書）、つまり「心情の芸術」であると定義する。

ヘーゲルの「芸術終焉論」は、「絶対者の表現としての芸術」の終焉と、「芸術としての芸術」の誕生を証している。しかし、ヘーゲルが視野に収めた古典的芸術であれ、ロマン的芸術であれ、絶対者の存在は、芸術の内部と外部の違いこそあれ、揺るぎのないものであった。ところが、その後の科学技術の発達により、自然は魔的な力をはく奪され、概ね数理的に計量化され、神々がそこに住まう余地が奪われていった。そして、19世紀後半に至り、ニーチェが「神は死んだ」と宣告する。ここに至って、芸術の真理性ばかりか、普遍的人間性をも保証してくれていた存在を、われわれは喪失しつつある。かくして混沌の時代は始まり、その潮流が今日に流れ込んでいる。現代において「芸術」は、より絶望的な「終焉」へと向かっているかのようである。そこに新生の萌芽はあるのだろうか。

●参考文献

- 小田部胤久「ヘーゲル美学における芸術の新生と終焉」（『ヘーゲルを学ぶ人のために』所収 世界思想社 2001）
- 小田部胤久「『人間的』芸術の行方あるいは芸術の『非人間化』をめぐる——20世紀における芸術終焉論の変容」、伊坂青司「神話と芸術——古典主義とロマン主義の間」（『芸術の始まる時、尽きる時』所収 東北大学出版会 2007）
- 高柳茂「ヘーゲルの音楽美学」（『哲学』1959年9号所収 日本哲学学会）
- 竹内敏雄訳『美学』第1～3巻（『ヘーゲル全集』第18～20巻所収 岩波書店 1995-1996）

INFORMATION

チケット・インフォメーション

- 《2.29(土)発売分》 ■体験!はじめての雅楽(伶楽舎によるワークショップ) 2020.5.2(土)14:00(予定)
■シリーズ:ベートーヴェン〜時空を超えて〜Vol.2 アトリウム弦楽四重奏団 2020.6.6(土)14:00(予定)
■ちょっとお昼にクラシック ワーヘリ(ユーフォニアム&チューバ) 2020.6.28(日)13:30
■今昔雅楽集 三、千代の楽人(出演:伶楽舎) 2020.7.4(土)17:00

1〜3月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

- ◆ゆったりお昼にクラシック トリオ・インク
ベートーヴェン:人間、音楽家、伝説
2020.1.24(金)13:30(15:20頃終了予定)
- ◆水戸室内管弦楽団 第105回定期演奏会
(ヴァイオリン独奏:豊嶋泰嗣、オーボエ独奏:フィリップ・トンドゥル)
2.1(土)15:00、2.2(日)15:00
- ◆高山三智子 ピアノ・リサイタル
2.5(水)19:00
- ◆池辺晋一郎の肖像
2.8(土)16:00(オルガン・プレ演奏15:40)
- ◆兼氏規雄 クラリネット・リサイタル
2.11(火・祝)15:00
- ◆合唱セミナー2020 講師:田中信昭
2.16(日)10:00(16:00終了予定) ※別途、楽譜代が必要です。
- ◆ネクサス・プラスバンド 25th Anniversary Concert!
2.23(日・祝)14:00
- ◆河原忠之の《水戸 de Opera!》Vol.3
ドン・ジョヴァンニ〜モーツァルトとドイツの歌曲&アリア〜
2.24(月・振)16:00
- ◆水戸うらら女声合唱団 第8回演奏会
3.1(日)14:00
- ◆井上 修 ピアノ・リサイタル
3.7(土)17:00
- ◆M.L.R.(女声合唱)
3.8(日)15:00
- ◆所 香菜 ピアノ・リサイタル
3.15(日)15:00
- ◆ちょっとお昼にクラシック 砂川涼子(ソプラノ)
3.19(木)13:30(14:30頃終了予定)
- ◆塙 美里 サクソフォン・リサイタル
3.28(土)16:00
- ◆あひる会合唱団(混声合唱)
3.29(日)14:00

エントランスホール

- ◆パイプオルガン ブロムナード・コンサート(入場無料)
□2.9(日)尾崎麻衣子 13:00〜13:30
□2.15(土)甲斐弦也 12:30〜13:00/13:30〜14:00
□2.29(土)安井 歩 13:00〜13:30
□3.7(土)加藤慶子 12:00〜12:30/13:30〜14:00
□3.14(土)「市民のためのオルガン講座」発表会 13:00〜14:20
- ◆ブロムナード・コンサート EXTRA(入場無料)
1.19(日)渡邊真亜子(ピアノ) 12:00〜12:30/13:30〜14:00
- ◆「準・メルクル弦楽器賞とプロジェクト」発表会(入場無料)
3.22(日)13:00〜14:00

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

- ◆伝統芸能のススメ[狂言] 萬狂言 水戸公演 予定枚数終了
新作狂言『二人黄門』『宗論』
※スペシャル・トーク付き
作:磯田道史/演出・台本:野村万蔵
出演:野村 萬、野村万蔵、野村万之丞 ほか
1.25(土)14:00



「二人黄門」より

現代美術ギャラリー

- ◆森 英恵 世界にはばたく蝶
Madama butterfly, flying to the world
2.22(土)〜5.6(水・振)
【休館日】月曜日、2.25(火)
※ただし2.24、5.4(月・祝)は開館
【開館時間】9:30〜18:00 ※入場は17:30まで



HANA E MORI
Haute Couture Collection

◆ATMフェイス(接客案内係)を募集します!

応募資格/高校卒業以上。土・日・祝日の勤務が可能な方(学生は不可)
詳しくは当館ウェブサイトをご覧ください。応募締切 2.12(水)
お問い合わせ/水戸芸術館総務係 Tel.029-227-8111

2020年1月7日発行(第236号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、石井亮子、小野瀬咲子
発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)
Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30〜18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>
デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

■編集後記

「アナ雪」の舞台はノルウェーだそう。卒論でグリーグのピアノ・ソナタを取り上げたのは、何年前のことだったか…。とにかく、現在も行ってみたい国No.1のノルウェーです。2020年の夏こそはフィヨルドが見たい! (り)

昔は湯船につかるのが苦手でした。ここ1、2年くらいでお風呂が好きになり、最近は半身浴をしながらSNS徘徊をするのがブームです。そして風呂上がりのアイス。これは冬のほうがいいと感じるのは私だけでしょうか…?(咲)

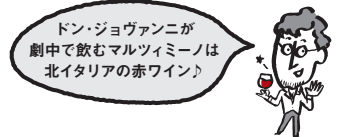
エアコンが苦手、部屋では円筒形の石油ストーブを使用しています。お湯も沸かせるし部屋の加温も完璧。鍋を載せればガスコンロなしで鍋料理もできるので重宝しています。消した後のにおいも冬らしくていい。(満)

ショスタコーヴィチ/バルシャイ(アイネ・クライネ・シンフォニー)はMCOが初演・初録音した曲。当時は弦楽合奏のみでしたが、現行版ではチェレスタが追加。MCOのCDは世界唯一の初稿での録音になったようです。(篠)

元プロ野球選手の高木豊さんや里崎智也さんが独自に解説しているYouTube動画にハマっています。シーズンオフもこれで毎日野球漬け。そう言えば、こういう動画をやっている人たちはユーチューバーって呼ぶんですね。(て)

子どもの頃憧れていたのは漫画家イラストレーター。せっせと漫画を描いては友達に見せたり、手書きの家族新聞を作ったりしていました。vivo号外を描かせていただいている最近、まるでいつかの夢の続きのようです。(樹)

超人的なスケジュールを入れ続け、日々を一杯生きる池辺晋一郎氏。その原点には、幼少時に病弱で医師が「二十歳までは生きられない」と言うのを聞いてしまったということがあるそうだ。明日は必ず来るものではなく、それだけに今を悔い無く生きたい。(中)



ドン・ジョヴァンニが
劇中で飲むマルツィーノは
北イタリアの赤ワイン